

六宗考

内野台嶺

六宗といふ語は、尙書舜典に見えてゐる。即ち

正月上日、受終于文祖。在瑤巖玉衡、以齊七政。肆類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神。

とあるのがそれである。此の「禋于六宗」に就て、孔安國は之に説明を下して、

精意以享、謂之禋。宗、尊也。所尊祭者、其祀有六。謂四時也、寒暑也、日也、月也、星也、水旱也。祭亦以攝告。

と云つてゐる。「禋」の字の説明に就ては、「禋之言煙。周人尙臭。煙、氣之臭聞者。……燔燎而升煙。所以報陽也。」

(周禮春官大宗伯注)といふ鄭玄説もあるけれども、今姑く之を措く。而して「六宗」に就ての孔安國の説明は、全く之を禮記祭法の記事に本づけることが出来ると思ふ。禮記祭法に曰く、

燔黍於壇、禋天也。瘞埋於泰折、祭地也。用騂犢。埋少牢於泰昭、祭時也。相近於坎壇、祭寒暑也。王宮、祭日也。夜明、祭月也。幽宗、祭星也。雩宗、祭水旱也。四坎壇、祭四方也。山林川谷丘陵、能出雲、爲風雨、見怪物、皆曰神。有天下者、祭百神。諸侯在其地、則祭之。亡其地、則不祭。

此の祭法の文に於て、初めの天・地兩者を除き、更に終りの四方・山林・川谷・丘陵の類を除けば、中間の時・寒暑・日・月・星・水旱の六者が残つて、之が即ち六宗だといふことになる。而して孔安國が、此の六者を取つて六宗と爲し

た理由は、前掲尙書舜典の文が、初めに「類_三于上帝_二」とあり、終りに「望_三山川_二、徧_三于群神_二」とあり、其の中間に「禋_三于六宗_二」とあるところから来たものであらうことは、孔穎達が之に疏して「必謂_三彼(祭法)之所_レ祭_二、是此(舜典)六宗_一者。彼(祭法)文、上有_三祭天祭地_二下有_三山谷丘陵_二。此(舜典)六宗之文、在_三上帝之下_二、山川之上_二。二者次第相類。故知_三是此六宗_二。」と云つた通りであらう。

尤も舜典には、「類_三于上帝_二」とあつて、后土を言はず、これ祭法の祭天祭地と一致しない様であるけれども、單に上帝とだけ言つて、后土を含ませる例は他にもある。例へば周頌昊天有成命の詩が、表面には后土のことを言はないけれども、詩序では「郊_三祀天地_二也」とあり、又中庸には「郊社之禮、所_三以事_二上帝_一也。」とあつて、后土の文字は見えてゐないけれども、勿論后土を省文したものであるが如き、その好適例である。

斯く見て來ると、舜典の「類_三于上帝_二」は、祭法の祭天祭地と相應じ、又舜典の「望_三于山川_二、徧_三于群神_二」は、祭法の四方・山林・川谷・丘陵以下を祭るに相當し、従つて舜典の「禋_三于六宗_二」は、祭法の時・寒暑・日・月・星・水旱を祭るのと一致することになり、孔安國の六宗説は、斯くして一應は首肯される。

のみならず、祭法の時・寒暑・日・月・星・水旱の六者を以て六宗としたことには、尙今一つの理由が存する。即ち祭法に據れば、「幽宗、祭_三星也。雩宗、祭_三水旱也。」とあつて、六者の中、星と水旱とは明かに「宗」の字が附せられて、幽宗・雩宗と呼ばれてゐるからである。鄭玄は説をなして、「宗」は「祭」の誤であり、而して「祭」は「營」と同義、従つて幽祭は星壇であり、雩祭は水旱壇であると言つてゐるけれども、之は勿論鄭玄の想像説であつて、別に動かすべからざる論據があるわけではない。其の點は寧ろ簡朝亮が、詩經や左傳に本づいて、鄭玄説を非也とした意見に賛意を表したい。簡朝亮は曰ふ、

鄭禮註云、…宗當_レ爲_レ祭。幽祭、星壇也。星以_レ昏見。雩祭、水旱壇也。春秋傳曰、山川之神、則水旱癘疫之不_レ時、於是乎祭_レ之。日月星辰之神、則雪霜風雨之不_レ時、於是乎祭_レ之。鄭讀_レ宗爲_レ祭。非也。

春秋於旱書大雩、此雩也。桓五年左傳云、龍見而雩。謂四月常雩也。先無災而雩之。非及有災而祭之也。此雩也。舜以攝政告祭。雖在正月、不嫌非時也。類、亦非時之祭也。且宗者、兼乎祭者也。詩雲漢云、旱既大甚、蘊隆蟲蟲。不殄禋祀、自郊徂宮。上下奠瘝、靡神不宗。言旱災而禋宗也。則幽宗可推也。(尙書集註述疏)

幽宗・雩宗を、敢て幽祭・雩祭に改めずとも、毫も差支ないであらうことは、蓋し簡朝亮の主張するが如きものであらう。併しながら、六宗の中、「宗」の字が附せられたるものは、僅かに此幽宗・雩宗の二者に過ぎずして、他の四者に「宗」の字が附せられてゐないのは何故であらうか。「宗」の字が附せられてあるが故に二者を六宗中のものとするならば、「宗」の字の附せられて居らぬ他の四者を六宗とするに就いては、そこに何等か特別の説明が無くては叶はぬ。此の事に關し、簡朝亮は此れ互見之例也として、

六宗、言其一(幽宗・雩宗)於四方之上者、宗爲天宗、方(四方)爲地道、宜於此焉別之也。言星則知日月、言水旱則知四時寒暑。故六宗必言其二也。

六宗皆行於天。月令所以言祈天宗也。然則水旱何以爲天宗乎。雩者祈雨之祭也。水者雨也。易云、坎者水也。又云、雨以潤之。潤萬物者、莫潤乎水。月令云、雨水不時、故祭水旱。而總之曰雩也。皆天宗也。(尙書集註述疏)

と説明してゐる。即ち星(幽宗)を言へば、日月は推して知るべく、水旱(雩宗)を言へば、四時寒暑は推して知るべく、而して此の六者何れも天宗に屬し、敢て「宗」と言はずとも、その宗たることは互見に據つて明かだといふのである。

斯くして祭法に本づく孔傳六宗説は、一見如何にも尤もらしく、相當確乎とした根據の上に立てるかの如くに見える。然るに之に對し、後世幾多の異論が簇出した。而して夫等數多くの異論の中、其の最も大きな流れをなす者は、次に述

べんとする鄭玄の六宗説である。

二

鄭玄は、舜典に「禋于六宗」とあり、而も「禋」は祭天の名なるを以て、六者皆天の神祇なりとし、星・辰・司中・司命・風師・雨師を以て六宗に當嵌めんとするものである。

鄭玄以、六宗言禋、與祭天同名、則六者皆是天之神祇。謂星・辰・司中・司命・風師・雨師。星、謂五緯也。辰、謂日月所會十二次也。司中・司命、文章第五第四星也。風師、箕也。雨師、畢也。(舜典孔疏所引)

而して鄭玄が、斯く星・辰・司中・司命・風師・雨師の六者を以て六宗となす所以の根據は、一に周禮春官大宗伯に存するものの如くである。即ち大宗伯に曰く、

以吉禮、事邦國之鬼神示。以禋祀、祀昊天上帝、以實柴、祀日月・星・辰、以槱燎、祀司中・司命・風師・雨師。以血祭、祭社稷・五祀・五嶽、以醴沈、祭山林・川澤、以醯醢、祭四方百物。以肆獻裸、享先王、以饋食、享先王、以嗣春享先王、以禴夏享先王、以嘗秋享先王、以烝冬享先王。

此の中、禋祀・實柴・槱燎の三者は祀天の三禮であり、血祭・醴沈・祭辜の三者は祭地の三禮であり、肆獻裸・饋食・祠・論・嘗・烝の六者は享鬼の六禮である。而も鄭玄の説明するところに據れば、此の祀天三禮中、「禋祀」は柴燒して煙を揚げることであり、「實柴」は柴上に牲牛を實すことであり、「槱燎」は柴薪を積み重ねることである。それ故仕事の順序から云へば、槱燎が一番先きであり、實柴がこれに次ぎ、禋祀は其の最後である。併しながら、この三事は祀天のどの禮にも共通に行はれる事柄であつて、禋祀には實柴が無く、又實柴には槱燎が無いと云つた様なものではない。

さすれば「禋」といふことは、(字義については勿論異論もあるが)祀天に通じた名稱であり、従つて昊天上帝を始めとして、日・月・星・辰・司中・司命・風師・雨師をも含めて考へることが可能なのである。併しながら、前掲の如く尙書舜典には、「類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神」とあり、上帝には特に「類」の別名が用ひられてゐる。

従つて上帝は勿論六宗以外のものでなければならず、又日月の二者は、禮祀郊特性や、同じく祭義の記事（後出）から見て、當然郊天の中に含まるべく、これ亦六宗以外のものとなつてしまひ、結局六宗は、其餘の六者、即ち星・辰・司中・司命・風師・雨師に歸著せざるを得なくなるといふのである。

偕以上は鄭玄六宗説の論據をなすものであるが、その事は、左に掲ぐる鄭駁異義の中に稍と詳しく説述されてある。書云、類_二于上帝、禮_二于六宗、望_二于山川。既云_二六宗言_レ禮、山川言_レ望、則六宗無_二山川_一明矣。大宗伯云、以_二禮祀_一、祀_二昊天上帝、以_二質柴_一、祀_二日・月・星・辰、以_二禋燎_一、祀_二司中・司命・風師・雨師。凡此所_レ祭、皆天神也。郊特性曰、郊之祭也、大報_レ天而主_レ日也。又祭義曰、郊之祭、大報_レ天而主_レ日、配以_二月_一。則郊天並祭_二日月_一可知。其餘星也・辰也・司中也・司命也・風師也・雨師也、此之謂_二六宗_一、亦明矣。（禮祀祭法孔疏所引）

三

以上述べ來つた孔安國説と鄭玄説とは、夫れ／＼禮記祭法の記事若くは周禮大宗伯の記事に根據を置くものであつて、先づ六宗説中の二大主流を爲すものと云つて宜い。併しながら、六宗説に關しては、古來幾多の支流とも云ふべきものがあつて、談仲々容易な業ではないが、今姑く煩を厭はず孔鄭兩説以外のものを次に列擧して見よう。

(一) 伏生・馬融説

大傳に云ふ、「萬物非_レ天不_レ覆。非_レ地不_レ載。非_レ春不_レ生。非_レ夏不_レ長。非_レ秋不_レ收。非_レ冬不_レ藏。故曰_二禮_二于六宗_一。」これに據れば、天地と四時とを合せて六宗と云つたものゝ如く、馬融も亦此の説を繼承してゐるが、併し「天」については前に「類_二于上帝_一」とあつて、「禮」に屬して居らず、又「地」については、後に「望_二于山川_一」とあつて、これ亦「禮」に屬して居ないところから見れば、此の天地四時を其の儘六宗と見ることは、其處に破綻を生ずる恐れがある。

(二) 歐陽和伯・大小夏侯説

此等の人の説によれば、「六宗者、上不_レ及_二天_一、下不_レ及_二地_一、旁不_レ及_二四方_一。居_二中央_一、恍惚無_レ有、神_二助陰陽變化_一、有_レ益_二於

人。(五經異義引)と云ふのであるから、要するに「上下四方」六者の中間にあるものを指して六宗と名づけたといふのであつて、丁度後世孟康や揚雄等の唱へた天地間游神の説と一致する。併しそのやうな空漠なものを指して六宗と名づけたといふことは、何等根據のない事柄であつて、命名法としても寧ろ無理なこじつけと云はざるを得ない。

(三) 孔光・劉歆説

此等の人は、易の六子を以て此の六宗に當て嵌めようとするのである。易の六子とは、八卦の中乾坤二卦を除いた六卦、即ち兌・離・震・巽・坎・艮を指すのであるが、更にこれを天地間に於ける重なる物象に當て嵌めると、澤・火・雷・風・水・山の六者となる。されば此等の人の考に據れば、此の澤・火・雷・風・水・山の六者を以て六宗と見做さうとするわけであるが、其の不可なることは、山川が既に「望」の中にあり、(望于山川)、「禮」の中に屬してゐない事實から見ても、極めて明かなる事柄と云はねばならない。

(四) 古尙書・賈逵説

古尙書説に據ると、「六宗、天地神之尊者。謂天宗三・地宗三。天宗、日・月・北辰。地宗、岱山・河・海。日月屬陰陽宗、北辰爲星宗、岱爲山宗、河爲水宗、海爲澤宗。祀天則天文從祀、祀地則地理從祀。(五經異義引)と云ふのであり、賈逵亦之に従ひ「天宗三、日・月・星辰。地宗三、河・海・岱」と云つてゐるが、これ亦第(三)説の場合と同様、六宗の中に山川の類が入つて來ることになり、「禮于六宗、望于山川」といふことと自然辻褃が合はなくなる。

(五) 虞喜・劉昭説

續漢志劉昭注に、虞喜の「六爲地數、則祭地」とあるを引き、更に之を敷衍して、「六、地數之中。舉中以該數也。禮者、葬祭也。非周禮之祭也」と説いて、經文の「禮」の字を「壝」の字に改め、六宗を地祭と見ようとするのであるが、經文の「禮」の字を「壝」の字に改めて説を爲さうとするが如きは、餘りにも大膽なる便宜説と云はねばならない。

(六) 張鬢說

晉初幽州の秀才張鬢上表して、「臣謂、禋于六宗、祀先祖考所尊者六。三昭三穆是也」と云ひ、三昭三穆を以て六宗に宛てようとしたが、若しさうだとすれば、「禋祭」は祀天の禮で無く、人祭「享鬼」の禮となる。且つ堯舜の時既に三昭三穆、太祖と併せて七廟存したことを認めるわけとなり、其の不可なることは云ふまでもあるまい。(拙著天子七廟說參照)張弛の六代帝王說の如きも、亦同様の理由(人祭說)で之を否定することが出来よう。

(七) 司馬彪說

司馬彪亦上表して、諸家の六宗說を歷難し、自己の意を述べて、「天宗者、日月星辰寒暑之屬也。地宗者、社稷五祀之屬也。四方宗者、四時五帝之屬也」と云ひ、天宗・地宗・四方宗を擧げてゐるけれども、要するにこれは第(四)の古尙書・賈逵說と、第(二)の歐陽和伯・大小夏侯說とを、考へ合せたやうな說であつて、廣範圍に亘り、餘りにも便宜的な感を與へる。

(八) 羅泌說

宋の羅泌は、天宗・地宗・岱宗・河宗・幽宗・雩宗を以て六宗に數へてゐる(五禮通考卷五四引)が、これ亦頗る雜然たるもので、何等六宗としての體系をなして居らない。全祖望をして「經文之上下皆凌犯。而亦輕重不以其倫。」(經史問答)と難ぜしめた所以であらう。

(九) 黃度說

同じく宋の黃度は、大體鄭玄說を踏襲してゐるけれども、但鄭玄の如く日月を除き去ることを不可なりとして、日一月二・星三・辰四・司中司命五・風師雨師六と數へてゐる(五禮通考卷五四引)。併し乍ら、日月を加へんが爲に敢て司中司命を一つにし、又風師雨師をも一つにしようとするが如き考方には、到底賛成出來がたいもの存するを感ぜしめる。

(一〇) 蔡德晉說

清朝の蔡德晉は、「禮六宗、即祀日月星辰也。」と云ひ、更に之を分説して、「日月星辰謂之六宗者、日一月二・緯星三・經星四・五辰五・十二辰六也。緯星即五星、經星則二十八宿。……五辰即五方之帝、十二辰則日月所會十二次也。」(五禮通考五四引)と云つてゐる。これは六宗を天體中に採り、一見如何にも尤もらしく思はれるが、諸これ等を數へて特に六宗となすについては、何等か他に證據となるべき用例が欲しいのだが、不幸にして今それが見當らない。

(一一) 惠士奇說

惠士奇は、古尙書伊訓及び周禮にある「方明」を以て、六宗となすものである。(全氏經史問答引)。方明とは、方四尺の木であるが、之に六色を設け、東方は青、南方は赤、西方は白、北方は黒、上は玄、下は黃とする。而して更に又六玉を設け、上は圭、下は璧、南方は璋、西方は琥、北方は璜、東方は圭を以て飾りとする。而も天子が之を祀るのは、實に六合の氣を備ふるからだといふのであるが、これ第(一二)の上下四旁中間の説に近く、且つ舜の當時果して方明なるものを祀ることがあつたかどうか、それも亦疑問である。金榜に亦此の説があるといふが(簡氏尙書集注述疏引)、其の非なることに關しては前同様である。

(一二) 沈彤說

沈彤は、左傳文公七年に、「水・火・金・木・土・穀、謂之六府。」とあるに本づいて、「六宗」は此の六府だといふのである。(全氏經史問答引)。而して姚鼐亦六宗を以て六府の神となすものであるが(簡氏尙書集注述疏引)、これ偶々六の數字の一致から思ひ付いた説であつて、既に天神の屬でもなく、而も又「禮于六宗」の上下の文に於て牴牾するところあるを否み難い。

(一三) 杭世駿說

杭世駿に六宗考があることは、許宗彥の鑑止水齋集中に見えるところである。不幸にして自分は未だそれを見て居な

いが、全祖望の經史問答中に引くところに據ると、彼は天地四嶽の神を以て六宗としたものゝ如くである。これ伏生・馬融（一）や、歐陽・夏侯（二）の説の變形とも見るべく、而も「類于上帝」と「望于山川」とをこつちやにしたものであつて、一層賛成し難い説といふべきである。

（一四）全祖望説

全祖望は、其の著經史問答の中に於て、多くの人の六宗説を列擧し、最後に自分の説を主張してゐるが、其の説の本づくところは、左傳昭公七年の條下に見えたる伯瑕の言にあるやうである。即ち伯瑕が晉侯に對へて、歲・時・日・月・星・辰の六者を六物と謂つてゐるが、此の六物こそ六宗に當るものだといふのである。即ち曰く、

愚嘗謂、虛植以六宗爲月令祈年之天宗。其義甚長。而特是天宗之目不著。則孔鄭兩家之說、皆得附之。而無以見其爲六。然則天宗之六者何也。曰、即左傳之六物也。六物者、曰歲、謂太歲也。曰時、謂四時也。曰日。曰月。曰星、則二十八宿也。曰辰、則十二次也。是六者皆天神也。天神之屬、無有過於此六者。云云。（經史問答、尙書答董

秉純問）

併しながら、これ亦沈彤や姚鼐の説と同じやうに、偶々數字の一致から思ひ付いた説であり、許宗彥から「若以六物六宗數適相符、而比而合之、則亦猶之劉歆孔光乾坤六子之說也」（鑑止水齋集六宗説）と評せられる所以でもある。

四

斯くして六宗説は、孔・鄭兩説を加へて十六家以上を數へることになるが、どれ一つとして未だ動かし難い證據を備へたものはない。比較的賛成者が多く、其の説の主流をなして居ると見られる孔・鄭兩説でさへも、猶議論の餘地は相當にある。即ち孔安國の説は、禮記の祭法に其の根據があると云ふものゝ、要するに祭法中に列べられた數多くの祭祀のうち、祭天祭地と祭四方との間にある、祭時以下の六者を取つて來たに過ぎないのであつて、それ以外大した根據はない。簡朝亮が大いに證據とする幽宗・雩宗についても、鄭玄は恐らく幽祭・雩祭の誤だらうと云つてゐる位である。

然るに孔子家語に（孔叢子亦同）宰我が六宗を問うた時、孔子が答ふるに此の四時・寒暑・日・月・星・水旱を以てせられたといふので、此の説を信ずる者は相當に多く、王肅や、蘇軾や、朱熹や、蔡沈や、方觀承や、簡朝亮や、皆それであるけれども、併し孔子家語が王肅の僞書であるといふことは既に定評があり、此の尙書孔安國傳の説なるものも、或は王肅あたりの僞傳ではあるまいかと云ふやうな疑問さへ生じて來て、従つて此の孔傳の六宗説なるものは、その根柢が頗るぐらつて來るのである。（而して此の事は又、王肅と鄭玄との對立關係にまで、問題が發展して來る可能性がある。）

加之、此の舜典の「類_二于上帝_一、禋_二于六宗_一、望_二于山川_一、徧_二于群神_一。」といふことが、果して舜の攝位告祭の禮でありとすれば、寒暑や水旱の如きものまでを、特に取り出して六宗の中に加へ、態々之に告祭する必要があるかどうかさへ、疑へば疑はれるに於てをやである。其の點に關しては、王廉も既に之を論じて、「夫舜類_二于上帝_一、禋_二于六宗_一、望_二于山川_一、徧_二于群神_一。乃是攝位告祭之禮。安得禋祈之禮_一哉。……告_二攝位于天地山川群神_一、足矣。何必告_二于四時寒暑水旱_一哉。」（荊川稗編卷二十三引）と云つてゐる位である。而して王廉は更に論を進めて、六宗を以て地祇だとなし、「蓋六爲_二地數_一。宗、尊也。且序_二其次_一、地祇正當_レ在_二上帝之後_一、山川群神之上。」と論究してゐるが、かうなると猶これ第（五）に擧げた虞喜・劉昭説に還元するものであつて、結局六は地數だといふことゝ、六宗が上帝と山川群神との間にあるといふこと以外には、別に確たる典據もないやうである。

兎もあれ、斯くして孔安國説も、未だ遽かに之を採用し難いものとなつてしまつた。然らば今一つの主流をなすところの鄭玄説は果してどんなものであらうか。

鄭玄説の根據が周禮の大宗伯にあることは、前既に論究したところである。鄭玄は周禮の禋祭が天の祭祀に限られて居るところから推して、舜典の「禋_二于六宗_一。」といふことも、従つて天祭に屬せねばならぬとするものである。「禋」が果して鄭玄の言ふ如く「煙」を揚げる義であるか、或は孔安國傳の言ふ如く「精意以享」の義であるか、それも既に問

題であり、且又舜の時の「禋」が、果して周時の「禋」と一致するかどうかとも、勿論一應疑ふべき事柄ではあるが、併し何れにせよ、前後の文例から考へて、凡そ天に屬する祭祀であらうことは想像に難くない。そこで鄭玄も周禮大宗伯の祀天に之を結び付け、昊天上帝と日月とを除いた他の六者、即ち星・辰・司中・司命・觀師・雨師を以て六宗と見做したことは、既に第二項に於て詳述した通りである。而して張融や、賈公彥や、孔穎達や、許宗彥等は、何れも皆此の説を以て是なりとしてゐるやうである。

併し乍ら、鄭玄の言ふところに據れば、「星」は五緯であり、「辰」は日月會する所の十二次であり、司中・司命は文昌宮中の第五第四の星であり、觀師は箕星、雨師は畢星であるといふ。これ等の説明に就ても、勿論異議無きを得ないのであるが、其の問題は姑く之を別の機會に譲るとし、偕此のやうに、一見寄せ集めの雜然たる種類のものが、果して舜の時代に六宗として考へられたかどうか、其處に既に根本的な疑問さへ生じて來るのである。一體此のやうな考へ方は、上下一千年も隔つた舜時と周時とを、同一のものとして考へるところから生じて來る謬想であつて、孔安國傳の説と同様、其處に吾人が一步退いて考へ直さねばならない必要が存在して居りはすまいか。

勿論「殷因於夏禮、所損益可レ知也。周因於殷禮、所損益可レ知也」で、周の禮制に前代を踏襲したものゝあるべきは言を俟たない。併しながら思想の進展は年と共に加はるのであつて、従つて考へ方が粗より精に、簡より繁に入るべきは當然の順序である。此の意味に於て、吾人は舜典の六宗を、新たに堯舜時代に溯つて考へて見る必要があると思ふのである。

五

それには舜典の記事が、「肆類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神。」の順序に列べてあり、又此の祭祀が、正月上日、終を文祖に受け、之を諸神に告祭したものであるといふことを、先づ以て考慮に入れてかゝらねばならない。そこで此の考慮の上に立つて考へる時、「六宗」の地位は、昊天上帝よりは下だが、天下の名山大川よりは上であることを

知る。而して日月星辰が其の間に入り來るべきは寧ろ當然であつて、鄭玄は郊特牲や祭義に因つて日月を除外してゐるけれども(第二項参照)、あれは郊祭の場合に、日月を以て天神の代表とする意味にも解せられ、日月の正祭は別に存するやうであるから、未だ必ずしも六宗の中から除外すべき程の理由とはならない。

そこで第(一〇)の蔡德晉説の如くに、「日一・月二・緯星三・經星四・五辰五・十二辰六也」といふ考へ方も出て來るわけだが、但「星」を經星・緯星の二つに分け、又「辰」を五辰・十二辰の二つに分けて、強ひて六宗の數に合せようとしたり可成りの便宜があるやうに思はれる。

そこで日月星辰以外の二宗を、天宗の中に於て求めようとするならば、周禮に據つて之を司中・司命若くは飄師・雨師に求むべきか、乃至は祭法に據つて之を四時なり寒暑なり水旱なりに求むべきか、それとも此等とは全く別な方面に於て之を求むべきかといふことになるのだが、さうなつて來ると、事は仲々容易でなくなる。第(九)の黃度説が、「日一・月二・星三・辰四・司中司命五・風師雨師六」と數へあげたのは、洵に巧な數へ方ではあるが、司中・司命を一つにし、又風師・雨師を一つにするが如きは、餘りにも唯數を合せんが爲の便宜方法としか思はれない。

一體「宗」といふ文字は、古來「宗は尊也」と解釋せられ、廟宇の中に神位の奉安せられた形である。されば自然宗廟に關係ある事柄に多く用ひられ(祖宗大宗小宗の類)てはゐるが、併し月令孟冬の條にも「天子乃祈來年于天宗」とある位で、獨り宗廟のみならず、天地の神々にあつても、其の尊ぶべきものに對しては、亦「宗」の字を以て之に宛てゝゐるのである。そこで「禋」の字を、孔安國傳の言ふ如くに、「精意以享」と見るのが正しいとするならば、六宗は必ずしも天神に限らずとも宜いことになり、従つて第(一)の天地四時説以下、地祇説やら、三昭三穆説やら(何れも前掲)、その他色々な説が飛び出して來て、一應は此等について吟味せねばならぬことにもなるのである。

そこで此の觀點に立ち、上帝と山川との間に於て、攝位を告祭すべき程の神々を求むるならば、日月星辰以外にあつては、先づ指を社稷に届せねばなるまい。併し乍ら、日月星辰が天神であるにか、はらず、社稷が地神であるといふこ

とは、此の結合をして頗る不統一たらしめる。何故なれば、凡そ名数の如きものにあつては、同じ範疇に入り得べきものを以て之を成立せしめるのが普通であり、従つて天と地との如き、全く別範疇に屬するものを取り入れて、以て一つの名数を拵へあげるといふことは、甚だ不自然のことと云はねばならないからである。是に於てか、これも亦結局は非難を蒙ることを免れないであらう。

そこで此の六宗全體を同じ範疇の中に於て求めることになる、或は天神中に於て求める方法もあり、或は地祇中に於て求める方法もあり、乃至は人鬼中に於て求める方法もある。併し乍ら、前既に述べた如く、舜典の文の前後の排列から見、此の六宗はどうも天神の中に於て之を求むべきが穩當のやうに思はれる。之を天神中に求めた孔傳や鄭説の、比較的賛成者が多いのも其處に原因が存すると云はねばならない。鄭玄の「禋は煙也」と見る説は、一層此の事を有力にする。

斯くして最後に、自分の短見を陳べて見るべき段取りとなつた。自分は前にも述べた如く、六宗の問題は、敢て周禮や祭法の記事に拘泥せず、堯舜時代に溯り、白紙に還元して考察すべきものであらうと考へる。此の考へ方から堯典を見る時、

欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時。云云。

とある言葉は、暗々裡に此の六宗を示唆してゐるかの如くに思はれてならないのである。尤も此の中、昊天の神は上帝であること云ふ迄もないから、之は六宗中より取り除けて考へねばならず、従つて六宗は、日・月・星・辰・時を以て之に宛て嵌めねばならぬことになるのだが、但し日・月・星・辰・時の五者が、どうして六宗になり得るか、それにはそれ相應の理由がなくてはなるまい。ところで堯典の後文に據れば、此の「時」が四時であることは云ふまでもない。それ故「時」を四時として數へる段になると、日・月・星・辰を合せて八つになる。併し茲に考ふべき事柄は、星・辰の二者が、時として、一かたまりのものとして數へられることである。論より證據、鄭玄は此の堯典の星辰を註して單

に二十八宿と云つてゐる。社・稷の二者が國家の意味に用ひられ、山・川の二者が土地の別名として解せられるのも、又祭法に於ける寒・暑が一纏めのものとして取扱はれ、水・旱が雩祭の中に總べ括られて居るが如きも、全く其の同例に外ならない。して見ると、此等の例から類推して、日・月の二者を同じ、かたまりのものとして數へることが、果して出来ないものであらうかどうか。若し此のことにして許容されるとするならば、日月と星辰とが、それ／＼一宗として數へ擧げられ、四時の四宗と合せて、こゝに六宗なる數が成立するわけである。

併し乍ら、萬一此の事が許容されないとするならば、自分は寧ろ第(一四)に擧げた全祖望の六物説(歲・時・日・月・星・辰)に左袒するものであるが、但し其の理由は、偶々左傳に六物のことがあるからといふのではなしに、同じく堯典に「定四時成歲」とあるところから來たものであること言ふまでもない。(十月十五日)